

市化に伴って溜池本来の役割が消失すると共に、養魚や釣り、ゴルフ等レジャーの場、あるいは下水の処理池等に転用されたり、土地造成のため池そのものが埋められたりする事例も増えるのではないかと思われ、放っておけば経済的価値の無い水生動植物の多くが絶滅する事は充分にあり得ると考えられる。

なお、文中の数字は主として統計年鑑より借用したものである。

引用文献

- (1) 広島県地質図説明書 (1964)
- (2) 楠見久、鷹村權監修：広島県地学のガイド、コロナ社 (1979)
- (3) 鷹村權：広島地質をめぐって、日曜の地学シリーズ7、築地書館 (1979)

Aquatics Vol. 8, No. 4 抄録

○Water Paspalum (Mike Bodle)

水辺に緑のマットを形成する water paspalum と総称されるイネ科植物 (スズメノヒエ属でフロリダ州では *P. notatum* がもっとも普通にみられる) の成長、群落の構造、分布について紹介している。多産される種子は水鳥の餌となり、水辺の密な群落は大小の動物のねぐらを提供する。本来は多年草であるが、毎年晩秋に大部分が枯死する。

○A Preliminary Literature Review on Vegetation and Fisheries with Emphasis on the Largemouth Bass, Bluegill and Hydrilla (Joe Hinkle)

水草の繁茂状況と漁獲量との関係についての総説であり、特にオオクチバス、ブルーギル、クロモに関する文献が全部で94編引用されている。魚類に対する水草の有用性、そして高密度になった場合の悪影響、そして帰化植物であるクロモの物理的・化学的・生物学的管理(制御)法が書かれている。一般に水草の密度が10~40%の時に水辺の動物や魚類にとってよい状態であり、水体を多目的に利用する場合はこの下限値(10%)が、魚や鳥をふやす場合には上限値40%に保つのがよいと提案している。

○10th Anniversary of the FAPMS

1986年10月にプラント市で開かれた第10回の大会の様子が6枚の写真で紹介されている。

○Transplanting Bulrush to Enhance Fisheries

and Aquatic Habitat (Steve Marshall)

植生を欠いた湖岸に人為的に抽水植物(この場合はカヤツリグサ科の *Scirpus californicus*) を植栽してその定着について経年的に観察した結果を紹介している。結果は2ヶ所の湖でいずれも良好であり、水鳥の繁殖や魚の餌やかくれ家の提供など多くのメリットがあるとしている。

○Pesticide Safety : A Continuing Concern (Dr. William J. Becker)

以前からの人々の関心事である殺虫剤などの安全性について、なぜ人々が不審感を持つのかについて解説している。不審感をぬぐい去るためにはまず薬剤を扱かう人々が正しい方法で(たとえば注意書き通りに薬剤を使用し、保存を行うといったごく当り前の行為) 薬剤を取り扱かうことが必要としている。薬剤そのものは高品質のものを多量に得るためには不可欠であるとしている。

○Letters to the Editor (Larry E. Nall)

2, 4-Dと非ホジキンリンパ腫(non-Hodg Kin's lymphoma)の発生率との相関を報告した最近の医学誌の論文を(論文の著者は国立ガン研究所の学者で、カンサス州の数百人の人々の診断から、このガン(NHL)が農業に携わる人々、特に2, 4-Dに曝された人に多く発生していることを疫学的に示したもの)、FAPMSの大会で何人かの人々がけなすのを聞いた読者からの手紙。この医学誌の論文の内容の正否は別として、薬剤を現場で扱かっている人々は科学者・専門家を信じていることを忘れずに、公明正大に彼らの健康を守ってほしいと結んでいる。

(国井 秀伸)